

1947年のレヒによるハリー・S・トルーマン大統領に対する手紙爆弾計画

1947年の中頃、英国委任統治領パレスチナで緊張が高まる中、シオニストの準軍事組織レヒ（別名スターン・ギャング）は、アメリカ合衆国大統領ハリー・S・トルーマンを手紙爆弾で標的にする大胆だが最終的に失敗に終わった企てを計画しました。このあまり知られていない事件は、レヒのより悪名高い行為によって影に隠れていますが、ユダヤ国家のビジョンを妨げるとされる国際的な人物を攻撃する同グループの意欲を反映しています。この計画は危害を及ぼさなかったものの、1948年のイスラエル建国に至るまでのアメリカの外交政策とユダヤ人の蜂起の不安定な交差点を強調しています。

背景：レヒとパレスチナのための闘争

1940年にアブラハム・スターンによって設立されたレヒは、より大きな組織であるイルグン・ツヴァイ・レウミから分離した過激な分派でした。両者ともパレスチナにおける英国支配を終わらせ、ユダヤ国家を設立することを目指していました。より抑制的なイルグンとは異なり、レヒは暗殺や爆破といった過激な戦術を採用し、英国の役人、アラブの民間人、さらには穏健なユダヤ人を標的にしました。1947年までに、レヒのキャンペーンは、1939年の白書に明記された英国の厳格なユダヤ人移民政策に対する苛立ちと、パレスチナ問題の解決に向けた国際社会の遅々とした進展によって勢いを増していました。

1945年4月に大統領に就任したハリー・S・トルーマンは、この文脈で中心的な人物でした。ユダヤ人難民やシオニストの大義に同情的だったトルーマンは、ユダヤ人の故郷の設立を支持し、1948年5月14日のイスラエル独立宣言の数分後にイスラエルを承認したことで有名です。しかし、1947年には、彼の政権は相反する圧力に直面していました。ユダヤ人の願望を支持しつつ、アラブ諸国との関係を維持し、英国委任統治の混乱に巻き込まれることを避ける必要があります。トルーマンのパレスチナへのユダヤ人移民の増加と国連の分割案の支持は、レヒのようなグループには不十分と見なされ、遅延や妥協は裏切りとみなされました。

計画：ホワイトハウスへの手紙爆弾

1947年の中頃、レヒの作業者はトルーマン大統領とホワイトハウスの上級スタッフに宛てた一連の手紙爆弾を郵送しました。これらの装置は、通常の郵便物に偽装されており、英国の外務大臣アーネスト・ベヴィンや植民地大臣アーサー・クリーチ・ジョーンズを含む英国の役人に同様の爆弾が送られたより広範なキャンペーンの一部でした。この計画はレヒの指導部によって組織され、後にイスラエル首相となるイツハク・シャミールなど、この時期のレヒの作戦で重要な役割を果たした人物が関与していた可能性が高いです。

手紙爆弾は、標的に到達する前に、恐らくアメリカの郵便または治安機関によって傍受されました。ただし、傍受の具体的な詳細はほとんどありません。爆発は発生せず、負傷者や死亡者の報告もありませんでした。この事件は当時、ほとんど公の注目を集めず、恐らくアメリカとシオニストの関係を悪化させたり、さらなる攻撃を誘発したりするのを避けるためでした。アメリカ大統領に対する暗殺未遂やレヒの活動に関する歴史的記録は、この計画の存在を確認していますが、詳細は限られており、マイナーで失敗に終わった作戦としてのその位置づけを反映しています。

動機：なぜトルーマンを標的にしたのか？

レヒがトルーマンを標的にした決定は、アメリカの政策がシオニストの目標を十分に支持していないという彼らの認識に由来していました。トルーマンがユダヤ人の移民やユダヤ人の故郷を支持していたにもかかわらず、レヒは彼の政権のアラブや英国の利益を均衡させる慎重なアプローチを障害と見なしました。グループのより広範な戦略は、英国支配に対する「解放戦争」を国際化し、グローバルな大国に決定的な行動を迫ることを目指していました。トルーマンを標的にすることで、レヒはどの指導者も彼らの手の届かないところにはいないというメッセージを送り、外交の停滞を打破し、彼らの大義に注目を集めることを望んでいました。

手紙爆弾の戦術はレヒにとって新しいものではありませんでした。彼らは以前の攻撃でこの手法を先駆けて使用しており、1946年の英国役人に対する試みや、1944年の中東担当英国国務大臣ロード・モインの暗殺などが含まれます。1947年のキャンペーンは、このアプローチをアメリカにまで拡大し、パレスチナ紛争が激化する中でのレヒの増大する大胆さと絶望を反映していました。

余波と影響

この失敗に終わった計画は、即座の影響はほとんどありませんでした。トルーマンは動じず、パレスチナに対するアメリカの政策を形成し続け、1948年のイスラエルの迅速な承認でその頂点に達しました。この事件は、アメリカとシオニストの関係を大きく変えることはなく、恐らくその秘密性とユダヤ国家へのアメリカの支持という広範な文脈によるものでした。国連、英国、米国政府、そしてデビッド・ベン＝グリオンなどの主流シオニスト指導者によってテロ組織として非難されたレヒは、1948年のイスラエル建国後に解散しました。そのメンバーはイスラエル国防軍に統合され、シャミールのような一部は著名な政治的役割に昇進しました。

この計画の歴史的叙述における不明瞭さは、その具体的な結果の欠如と当時のアメリカとイスラエルの関係の敏感さを反映しています。1948年のレヒによるフォルケ・ベルナドッテの暗殺が国際的な憤りを引き起こしたのは異なり、トルーマン計画は脚注にとどまり、レヒの活動やアメリカ大統領の安全保障に関する記述で軽く触れられるだけでした。

遺産と歴史的意義

1947年のトルーマンに対する手紙爆弾計画は、イスラエル以前のシオニスト運動の複雑さを浮き彫りにし、穏健派と過激派の両方の派閥を包含していました。ハイム・ワイツマンやベン＝

グリオンなどの人物によって非難されたレヒの行動は、最終的にイスラエルの建国に貢献したより広範な闘争の一部でしたが、その方法は同盟者を遠ざけ、外交を複雑にしました。この事件はまた、トルーマンがアラブとイスラエルの紛争におけるアメリカの役割を定義するために国内外の圧力の中で航海した、中東におけるアメリカの関与の初期の課題を強調しています。

今日、この計画は、アメリカ大統領に対する暗殺未遂やレヒの物議を醸す遺産に関する議論で時折言及されます。Xのようなプラットフォームでは、この事件への言及がアメリカとイスラエルの関係に疑問を投げかける叙述に現れることがあります。しばしばニュアンスを欠き、レヒの影響を誇張します。歴史家はこの計画をマイナーだが示唆に富むエピソードと見なし、過激派グループがその目標を追求するためにどこまで行く準備ができていたかを示しています。

結論

1947年のレヒによるハリー・S・トルーマン大統領に対する手紙爆弾計画は、パレスチナ紛争の重要な瞬間に主要な国際的人物を威嚇する失敗に終わった試みでした。危害を及ぼさなかったものの、レヒの過激な戦術と国家建設のためのシオニストの闘争の高まる賭けを反映しています。トルーマンの回復力とユダヤ国家への継続的な支持は、現代の中東を形成するのに役立ち、レヒの計画を変革の時代における一過性ではあるが大胆な反抗行為にしました。